

寧楽と書けば唐天竺や春霞

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

積りたる蕊の歲月山桜

山桜散るや即ち山の土

夏の夜に干されて長き禪かな

俳人や古茶の別れを惜しむべく

小夜更けて砂浜氷る波の音

火事跡の黒き柱や雪女郎

幼子も嚏の時は立て続け

墨の香や探梅の日を心待ち

天の川あふるるばかり神の留守

天の川にかかると



かろはの歌

ナラカろは

代るかろは

コトナラの

日の沈む

ナラカろは

春霞も唐天竺も春霞

2019・12・1 【角川俳句賞2020】

全32句

ほろやれさうなガムの水

奈良山も唐天竺も春霞

名月や水なみなみとダム満たす

うすら氷や飴玉舌のなすままに

王道を歩むが如く鹿の角

残雪の踏み砕かれて割れて消ゆ

ハミングは楽しからずや蚯蚓鳴く

残雪の踏み砕かれて粉々に

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

残雪の踏み砕かれて割れて解け

金賞の菊芳うて縁側へ

残雪の踏み砕かれて土は濡れ

金賞の菊を芳ふ日向ぼこ

消印に消されし切手雁帰る

春キャベツほどに銀杏の色付きぬ

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

干柿に憧れてゐる熟柿かな

生家跡には一面の春の草

木の紅葉道の紅葉と豊かなる

積りたる蕊の歲月山桜

色変へぬ松を囃せる紅葉かな

山桜散るや即ち山の土

小夜更けて砂浜氷る波の音

夏の夜に干されて長き禪かな

火事跡の黒き柱や雪女郎

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

幼子も嚏の時は立て続け

パスのドア開くやうな音缶ビール

墨の香や探梅の日を心待ち

俳人や古茶の別れを惜しむべく

天の川あふるるばかり神の留守

長き夜の胎内に夢うつつなり

長き夜の知に棹さすは科学の子

17行3段組12ポ 2019年12月1日 21:20 桐9

くらぶもいへるうなをと取って  
らんかスオにあり

12.1 あいたのに

梓熟れて皮の如く  
枝に垂る

12.5

夕方に雪は下り

12.5



2019・12・12 【角川俳句賞2020】 全29句

喉元まで来てゐる言葉嬰の春

奈良山も唐天竺も春霞 鳴鳴くや泣き出しさうな空の色

旧交を温めてゐる春の風 引かれ行く牛の筋骨草の花

うすら氷や飴玉舌のなすままに 春キヤベツほどに銀杏の色付きぬ

残雪は踏み砕かれて土は濡れ 干柿に憧れてゐる熟柿かな

消印に消されし切手雁帰る 木の紅葉道の紅葉と豊かなる

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙 色変へぬ松を囁せる紅葉かな

生家跡には一面の春の草 小夜更けて砂浜氷る波の音

積りたる蕊の歳月山桜 火事跡の黒き柱や雪女郎

夏の夜に干されて長き禪かな 幼子も噓の時は立て続け

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな 墨の香や探梅の日を心待ち

俳人や古茶の別れを惜しむべく 天の川あふるるばかり神の留守

長き夜の知に棹さすは科学の子

長き夜の胎内にゐて夢うつつ

名月や水なみなみとダム満たす

ペランダの屋根に色鳥透きとほる

王道を歩むが如く鹿の角

△ ハミングも楽しからずや蚯蚓鳴く

△ 引かれ行く牛の筋骨草の花

△ 春キヤベツほどに銀杏の色付きぬ

△ 干柿に憧れてゐる熟柿かな

△ 木の紅葉道の紅葉と豊かなる

△ 色変へぬ松を囁せる紅葉かな

△ 小夜更けて砂浜氷る波の音

△ 火事跡の黒き柱や雪女郎

△ 幼子も噓の時は立て続け

△ 墨の香や探梅の日を心待ち

△ 天の川あふるるばかり神の留守

東風吹かば

三笠山?

泣き出し

波の音 恋の月

光月と満月と

山桜かな

光月の中の満月 山桜

れつとよとある水の氷に

2020・1・28 【角川俳句賞2020全90】 選38句

アンビエラ

喉元まで来てゐる言葉嬰の春

~~ハミングも楽しからずや蚯蚓鳴く~~

春の日は眩しや希望退職す

奈良山も唐天竺も春霞

~~鴉鳴くや~~ひ~~き出しさうな空の色~~

~~日射にも病ありけり日射病~~

旧交を温めてゐる春の風

~~引かれ行く牛の筋骨草の花~~

見えてゐる島には寄らず鳥帰る

うすら氷や飴玉舌のなすままに

~~春キヤベツほどに銀杏の色付きぬ~~

吾輩は西日に立てるポストなり

残雪は踏み砕かれて土は濡れ

干柿に撞れてゐる熟柿かな

消印に消されし切手雁帰る

木の紅葉道の紅葉と豊かなる

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

~~色変へぬ松を囁せる紅葉かな~~

生家跡には一面の春の草

~~小夜更けて砂浜氷る波の音~~

積りたる蕊の歳月山桜

火事跡の黒き柱や雪女郎

夏の夜に干されて長き禪かな

幼子も嚏の時は立て続け

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

墨の香や探梅の日を心待ち

俳人や古茶の別れを惜しむべく

~~天の川あふるるばかり神の留守~~

長き夜の知に棹さすは科学の子

下萌に土龍の穴の美しき

長き夜の胎内にゐて夢うつつ

~~電柱や出水の町に灯を点す~~

名月や水なみなみとダム満たす

水切の筈になりなば涼しかる

ペランダの屋根に色鳥透きとほる

切株を囲む走り根露けしや

王道を歩むが如く鹿の角

少しづつ進む夜業の時計なり



2020・一・28 【角川俳句賞2020全91】 選27句

喉元まで来てゐる言葉嬰の春  
春の日は眩しや希望退職す

切株を囲む走り根露けしや  
少しづつ進む夜業の時計なり

△奈良山も唐天竺も春霞

王道を歩むが如く鹿の角

△旧交を温めてゐる春の風

賜鳴くや泣き出しさうな空の色

うすら氷や飴玉舌のなすままに

引かれ行く牛の筋骨秋桜

残雪は踏み砕かれて土は濡れ

干柿に憧れてゐる熟柿かな

消印に消されし切手雁帰る

色変へぬ松を囃せる紅葉かな

見えてゐる島には寄らず鳥帰る

火事跡の黒き柱や雪女郎

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

幼子も嚏の時は立て続け

生家跡には一面の春の草

墨の香や探梅の日を心待ち

下萌に土龍の穴の美しき

水切の筈になりなば涼しかる

吾輩は西日に立てるポストなり

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

俳人や古茶の別れを惜しむべく

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月や水なみなみとダム満たす

こつこつと夜業の人のまへに人

かまけき

干柿の行に  
熟柿の枝に

流りて水切の龍ヤ

春遠く水切の龍の水たまり

ダム湖の底の水たまり

2020・一・29 【角川俳句賞2020 全109】 選18句

春浅く水切籠の水たまり 墨の香や探梅の日を心待ち

うすら氷や飴玉舌のなすままに

残雪は踏み砕かれて土は濡れ

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

下萌に土龍の穴の美しき

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

俳人や古茶の別れを惜しむべく

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月やダム湖の底の取水口

切株を囲む走り根露けしや

王道を歩むが如く鹿の角

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな

火事跡の黒き柱や雪女郎

幼子も噓の時は立て続け

脚註



take?

2020.3.7 【角川俳句賞2020 全126句】 選23句

春浅く水切籠の残り水

うすら氷や飴玉舌のなすままに

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

下萌に土龍の穴の美しきま

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

俳人や古茶の別れを惜しむべく

教室にプール終りし子がぞろぞろ

秋の夜に切手を愛でるルーペかな

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月やダム湖の中の取水口

切株を囲む走り根露けしや

王道を歩むが如く鹿の角

鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな

荒海の向ふは佐渡や日短

火事跡の黒き柱や雪女郎

幼子も噓の時は立て続け

焚火みな手を結んでは開いては

墨の香や探梅の日を心待ち

白紙には返る術なき古日記

新白キの束束

新居

湯工座やとつとつとわが考へる

コウツキを

考へてみる

ミニレポート

3/8

白紙：へま紙なる...

腹にしっつける  
ナカネ？  
なんぞ知？

P

次回+workは  
応募予定

2020・3・10 【角川俳句賞2020 全14句】 選27句

「あしあみすを」 3.12

春浅く水切籠の残り水  
うすら氷や飴玉舌のなすままに

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ  
引かれ行く牛の貫禄秋桜

苗代や発芽とは身を腐らせて  
干柿は軒に熟柿は枝にかな

ループにて愛でる切手や春燈下  
荒海の向ふは佐渡や日短

消印に消されし切手雁帰る  
火事跡の黒き柱や雪女郎

目の玉の二つのままに蝌蚪蛙  
幼子も噓の時は立て続け

下萌に土龍の穴の美しき  
湯豆腐やふつふつと我が考へる

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな  
墨の香や探梅の日を心待ち

白玉を放ちげし氷水を捨つ  
白紙には返る術なき古日記

俳人や古茶の別れを惜しむべく  
言葉にも出廻らしのあり古茶淹れる

教室にプール終りし子がぞろぞろ  
古茶新茶

万緑の危ない橋を渡りけり  
古茶新茶

長き夜の知に棹さすは科学の子  
古茶新茶

名月やダム湖の中の取水口  
古茶新茶

切株を囲む走り根露けしや

王道を歩むが如く鹿の角  
鴉鳴くや泣き出しさうな空の色

古茶新茶  
古茶新茶  
古茶新茶  
古茶新茶

苗代や芽の外は  
身を減らして  
芽吹きとは  
あふれも  
あふれも  
あふれも  
あふれも



2020・3・12 【角川俳句賞2020全156】 選20句

春浅く水切籠の残り水 幼子も嚏の時は立て続け

飴玉は舌のなすまま春水 墨の香や探梅の日を心待ち

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ 白紙には返る術なき古日記

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

下萌に土龍の穴の美しき

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白玉を<sup>なませ</sup>放ちし<sup>冷やせ</sup>氷水を捨つ

教室にプール終りし子がぞろぞろ

万緑の危ない橋を<sup>中</sup>渡り<sup>けり</sup>

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月やダム湖の中の取水口

王道を歩むが如く鹿の角

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな

荒海の向ふは佐渡や日短

△火事跡の黒き柱や雪女郎

2020・3・13 【角川俳句賞2020 全181句】 選21句

春浅く水切籠の残り水 静かさや氷らんとして夜の水

飴玉は舌のなすまま春氷 幼子も嚏の時は立て続け

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ 墨の香や探梅の日を心待ち

耕して土の断面ばかりなり 白紙には返る術なき古日記

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

下萌に土龍の穴の美しき

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白玉を冷ましつ<sup>つ</sup>味見かな

教室にプール終りし子がぞろぞろ

万緑の中の危ない橋渡ろ

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月やダム湖の中の取水口

王道を歩むが如く鹿の角

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな

荒海の向ふは佐渡や日短



2020・3・14 【角川俳句賞2020 全200句】 選24句

春浅く水切籠の残り水 引かれ行く牛の貫禄秋桜

飴玉は舌のなすまま春氷 干柿は軒に熟柿は枝にかな

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ 荒海の向ふは佐渡や日短

耕して土の断面ばかりなり 店先に氷らむと夜の水たまり

消印に消されし切手雁帰る 幼子も嚏の時は立て続け

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙 墨の香や探梅の日を心待ち

下萌に土籠の穴の美しき 白紙へと返る術なき古日記

荒梅雨やマンションもある大通り

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白玉を冷ましつつちよと抓みもし

教室にプール終りし子がぞろぞろ

万緑の中の危ない橋渡ろ

長き夜の知に棹さすは科学の子

名月やダム湖の中の取水口

秋蝶は春を知らねどひらひらと

王道を歩むが如く鹿の角

直立は花の幼き芒かな

氷  
敵へ日の三日取直の  
白紙摺つ 3.15

2020・3・15 【角川俳句賞2020 全206句】 選26句

春~~残~~く水切籠の残り水  
春~~開~~けて日だまりにある水たまり

王道を歩むが如く鹿の角  
直立は花の~~幼~~き芒かな

3072  
tw1

飴玉は舌のなすまま春氷

引かれ行く牛の貫禄秋桜

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ

干柿は軒に熟柿は枝にかな

耕して土の断面ばかりなり

荒海の向ふは佐渡や日短

消印に消されし切手雁帰る

幼子も嚏の時は立て続け

目の玉は二つのままに~~蟬~~蚪蛙

みづからをなきものにする焚火かな

下萌に土龍の穴の美しき

墨の香や探梅の日を心待ち

荒梅雨やマンションもある大通り

白紙へと返る術なき古日記

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白玉を冷ましつちよと掴みもし

教室にプール終りし子が~~ぞろ~~ぞろ

汗の香の一つ一つを~~夜~~濯へ

万緑の中の危ない橋渡る

長き夜の知に棹さすは科学の子

満月やダム湖の中の取水口

秋蝶は春を知らねどひらひらと



2020・3・15 【角川俳句賞2020 全221句】 選27句

春なれや日だまりにある水たまり 王道を歩むが如く鹿の角

春浅く水切籠の残り水 直立は幼き花の芒かな

飴玉は舌のなすまま春氷 引かれ行く牛の貫禄秋桜

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ 干柿は軒に熟柿は枝にかな

耕して土の断面ばかりなり 荒海の向ふは佐渡や日短

消印に消されし切手雁帰る 幼子も嚏の時は立て続け

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙 ~~毛糸玉~~ほどの近さに本・積木

下萌に土龍の穴の美しき ~~みづ~~からをなきものにする焚火かな

荒梅雨やマンションもある大通り 墨の香や探梅の日を心待ち

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな 白紙へと返る術なき古日記

白玉を冷ましつつちよと掴みもし

教室にプールを終へし子がぞろぞろ

汗の香の一つ一つを夜濯へ

万緑の中の危ない橋渡る

長き夜の知に棹さすは科学の子

満月やダム湖の中の取水口

秋蝶は春を知らねどひらひらと

2020.3.16 角川俳句賞2020 全243句 選30句

春なれや日だまりにある水たまり

春浅く水切籠の残り水

飴玉は舌のなすまま春氷

残雪は踏み砕かれぬ土は濡れ

耕して土の断面ばかりなり

消印に消されし切手雁帰る

目の玉は二つのままに蝌蚪蛙

白梅や医者<sup>木蓮や</sup>の卵の徹夜明け

下萌に土龍の穴の美しき

荒梅雨やマンションもある大通り

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白玉を冷ましつつちよと掴みもし

教室にプールを終へし子がぞろぞろ

汗の香の<sup>はは</sup>一つ一つを夜濯へ

万緑の中の危ない橋渡る

長き夜の知に棹さすは科学の子

満月やダム湖の中の取水口

秋蝶は春を知らねどひらひらと

玉道を歩むが如く鹿の角

直立は幼き花の芒かな

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな

荒海の向ふは佐渡や日短

人気なきベンチに冬の鳩もゐず

湖は氷湖となつて日を拒む

幼子も嚏の時は立て続け

墨の香や探梅の日を心待ち

クリスマス<sup>ミスター</sup>基督もまた幸せに

みづからをなきものに<sup>戻</sup>する落葉焚

白紙へと返る術なき古日記

17行3段組12ポ 2020年3月16日 22:01 へ1 桐9

どの類も  
 プールの授業  
 戻す  
 教室にプールの授業  
 汗の香は  
 子らの知に  
 教室にプールの授業  
 汗の香は  
 子らの知に  
 教室にプールの授業  
 汗の香は  
 子らの知に

2020・3・17 【角川俳句賞2020 全282句】 選23句

春なれや日だまりにある水たまり 荒海の向ふは佐渡や日短

春浅く水切籠の残り水 幼子も嚏の時は立て続け

梅匂ふ医者の卵の徹夜明け みづからをなきものにする落葉焚

残雪は踏み砕かれて土濡らす 白紙へと戻る術なき古日記

消印に消されし切手雁帰る 湖は氷湖となつて日を拒む

耕して土の断面ばかりなり 墨の香や探梅の日を心待ち

ひらひらと蝶々は春を越えられず

汗の香はよく遊びたる子らのシャツ

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

水の香のプール名残の子がぞろぞろ~~ど~~

万緑の中の危ない橋渡ろ

秋蝶は春を知らねどひらひらと

王道を歩むが如く鹿の角

長き夜の知に棹さすは科学の子

満月やダム湖の中の取水口

引かれ行く牛の貫禄秋桜

干柿は軒に熟柿は枝にかな



くろく、つめく、はとをく

へす時いーもと明るこ楽しく

2020・3・17 【角川俳句賞2020 全285句】選23句

春なれや日だまりにある水たまり 荒海の向ふは佐渡や日短

春浅く水切籠の残り水 幼子も噓の時は立て続け

梅匂ふ医者の卵の徹夜明け みづからをなきものにする落葉焚

残雪の踏み砕かれて粉々に 白紙へと戻る術なき古日記

消印に消されし切手雁帰る 湖は氷湖となつて日を拒む

耕して土の断面ばかりなり 墨の香や探梅の日を心待ち

ひらひらと蝶々は春を越えられず <sup>結句は「初稿」を替へる</sup>

汗の香はよく遊びたる子らのシャツ <sup>コタマナ子</sup>

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな <sup>初稿に今期は</sup>

万緑の中の危ない橋渡ろ <sup>西戸の閑まりしま</sup>

水の香のプール帰りの親子連れ <sup>閑かすあり</sup>

秋蝶は春を知らねどひらひらと <sup>初稿に西戸の</sup>

王道を歩むが如く鹿の角 <sup>閑かす</sup>

満月やダム湖の中の取水口 <sup>閑かす</sup>

長き夜の知に棹さすは科学の子 <sup>閑かす</sup>

引かれ行く牛の貫禄秋桜 <sup>閑かす</sup>

干柿は軒に熟柿は枝にかな

初稿に今期は  
西戸の閑まりしま  
閑かすあり

結句は「初稿」を替へる  
コタマナ子

17行3段組12ポ 2020年3月17日 22:22 へ1 桐9

選20

毛虫あはれ  
夜はふる鳥も  
望む可にさる  
色去る春  
天谷にのぼる沙汰  
法れ差  
2通りの読み高夏

2020.3.19 【角川俳句賞2020 全299句】 選28句

定いはにも書き手

梅匂ふ医者の卵の徹夜明け

満月やダム湖の中の取水口

山々は山の名を告ぐ春の風

長き夜の知に棹さすは科学の子

春なれや日だまりにある水たまり

引かれ行く牛の貫禄秋桜

残雪の踏み砕かれて粉々に

干柿は軒に熟柿は枝にかな

春浅く水切籠の残り水

荒海の向ふは佐渡よ日短

消印に消されし切手雁帰る

幼子も噓の時は立て続け

耕して土の断面ばかりなり

みづからをなきものにす落葉焚

ビル裏は配管の巢や燕来る

白紙へと戻る術なき古日記

ひらひらと蝶々は春を越えられず

結局は初案に戻る炬燵かな

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

湖は氷湖となつて日を拒む

万緑の中の危ない橋渡ろ

墨の香や探梅の日を心待ち

今生の空を飛びゆく毛虫かな

水の香のプール帰りの親子連れ

浪考は浪の音かき

汗の香はよく遊びたる子らのシヤツ

母子かな

朝顔に今朝は雨戸の開かずあり

五六人

秋蝶は春を知らねどひらひらと

白ね年の竹反りし若菜

王道を歩むが如く鹿の角

俳句の  
二重読み

枝え上うえ 面おもて  
花よ

湖まうみ  
うみ

鹿か  
鹿かか

紙の紙  
紙の紙

フクバシ  
ルシ

煙柳かまろ  
歩くあうく

白うみま  
魂たま

泣きオニシ

初春  
手このなる

初夏  
秋冬

ハニ箱に白ね年は若菜  
かた

白ね年の竹反りし若菜  
イヤテ

浪考は浪の音かき  
おの心

西方に雲霞つた若菜



2020.3.19 【角川俳句賞2020 全308句】 選30句

③ 梅句ふ 医者セキの卵ワタシの徹夜明ツキけ  
 残雪は踏み碎かれて粉々に  
 王道を歩むが如く鹿の角

② 春あたらしく浅く水切籠の残り水  
 引かれ行く牛の貫禄秋桜  
 満月やダム湖の中の取水口

① 春なれや日だまりにある水たまり  
 山の名を山に告げゆく春の風  
 耕して土の断面ばかりなり

消印に消されし切手雁帰る  
 荒海の向ふは佐渡よ日短  
 幼子も噓の時は立て続け

お玉とはお玉杓子の頭なり  
 みづからをなきものにする落葉焚  
 白紙へと戻る術なき古日記

波音は波の残骸松の芯  
 結局は初案に戻る炬燵かな  
 湖は氷湖となつて日を拒む

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな  
 墨の香や探梅の日を心待ち

万緑の中の危ない橋わたる  
 今生の空を飛びゆく毛虫かな

水の香のプール帰りの五六人  
 汗の香はよく遊びたる子らのシャツ  
 朝顔に今朝は雨戸の開かずあり

17行3段組12ポ 2020年3月19日 22:29 へ1 桐9

夜行バス乗車に降りぬ  
 涙の中

波きにつづく波か  
 波のくくく  
 波のくくく

波きな波ようさく  
 3.21

角をよぶひて  
 角をよぶひて  
 角をよぶひて  
 砂糖菓子  
 全平糖をき  
 3.21

波きにつづく波あり  
 3.21  
 行方は気あす  
 今後はさしつかへ

上子  
 3.21



2020.3.21 【角川俳句賞2020 全331句】 選27句

春<sup>浅</sup>し日だまりにある水たまり

満月やダム湖の中の取水口

残雪は踏み砕かれて粉々に

長き夜の知に棹さすは科学の子

山の名を山に告げゆく春の風

干柿は軒に熟柿は枝にかな

耕して土の断面ばかりなり

夜行バス車庫に戻りぬ昼の虫

お玉とはお玉杓子の大頭

荒海の向ふは佐渡よ日短

消印に消されし切手雁帰る

幼子も嚏の時は立て続け

ビル裏に配管の巢や燕来る

みづからをなきものにする落葉焚

ひらひらと花びらは春越えられず

白紙へと戻る術なき古日記

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

湖は氷湖となつて日を拒む

万緑の中の危ない橋わたる

墨の香や探梅の日を心待ち

今生の空を飛びゆく毛虫かな

水の香のプール帰りの五六人

朝顔に今朝は雨戸の開かずあり

秋蝶は春を知らねどひらひらと

王道を歩むが如く鹿の角

引かれ行く牛の貫禄秋桜

ひとところ皺美しき熟柿かな

浅考の 2020.3.21 【角川俳句賞2020 全352句】 選26句

靡かや日だまりにある水たまり

長き夜の知に棹さすは科学の子

山の名を山に告げゆく春の風

干柿は軒に熟柿は枝にかな

耕して土の断面ばかりなり

夜行バス車庫に戻りぬ昼の虫

お玉とはお玉杓子の大頭

荒海の向ふは佐渡よ日短

消印に消されし切手雁帰る

幼子も嘆の時は立て続け

ビル裏に配管の巢や燕来る

みづからをなきものにする落葉焚

波音の夜空に消ゆる松の芯

白紙へと戻る術なき古日記

ひらひらと花びらは春越えられず

湖は氷湖となつて日を拒む

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

墨の香や探梅の日を心待ち

万緑の中の危ない橋わたる

今生の空を飛びゆく毛虫かな

水の香のプール帰りの五六人

朝顔に今朝は雨戸の開かずあり

ひらひらと春を知らざる秋の蝶

王道を歩むが如く鹿の角

引かれ行く牛の貫禄秋桜

満月やダム湖の中の取水口

浅考の  
下向き9年の暮るもなげつつ  
2020.3.22  
現住所の柿  
柿のつた黒く隠りし  
若葉が春

44-3 柿のつた  
ひらひら  
お玉とはお玉杓子の大頭  
お玉とはお玉杓子の大頭  
お玉とはお玉杓子の大頭  
お玉とはお玉杓子の大頭

Loop 2-4-2 22 柿  
2020.3.22 10079







2020・5・6 【角川俳句賞2020 全389句】 選31句

浅春の日だまりにある水たまり

追ふ馬は何処へゆきしすいつちよん

耕して土の断面ばかりなり

白も黄も春を知らざる秋の蝶

天井に届く悲しみ涅槃絵図

王道を歩むが如く鹿の角

仏生会桜餅など良からずや

引かれ行く牛の貫禄秋桜

393

お玉とはお玉杓子の大頭

満月やダム湖の中の取水口

消印に消されし切手雁帰る

長き夜の知に棹さすは科学の子

ビル裏に配管の巢や燕来る

夜行バス滴り洗ふ昼の虫

川沿ひの二階の窓に子猫をる

干柿は軒に熟柿は枝にかな

これは花これは花びらひらひらと

切株と刈田と距離を置きながら

波音の夜空に消ゆる松の芯

荒海の向ふは佐渡よ日短

海へ出て川塩辛き五月かな

幼子も嚏の時は立て続け

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

白紙へと戻る術なき古日記

万緑の中や危ない橋わたる

湖は氷湖となつて日を拒む

啜へられいまはの空を行く毛虫

墨の香や探梅の日を心待ち

水の香のプール帰りの五六人

青々と晴れ晴れと天高きかな

朝顔に今朝は雨戸の開かずあり

2020.5.8 【角川俳句賞2020 全393句】 選27句

浅春の日だまりにある水たまり

満月やダム湖の中の取水口

耕して土の断面ばかりなり

長き夜の知に棹さすは科学の子

天井に届く悲しみ涅槃絵図

夜行バス滴り洗ふ昼の虫

~~お玉とはお玉杓子の大頭~~

干柿は軒に熟柿は枝にかな

消印に消されし切手雁帰る

切株は刈田と距離を置きながら

ビル裏に配管の巢や燕来る

荒海の向ふは佐渡よ日短

川沿ひの二階の窓に子猫をる

~~幼子も噓の時は立て続け~~

~~これは花これは花びらひらひらと~~

~~白紙へと戻る術なき古日記~~

波音の夜空に消ゆる松の芯

湖は氷湖となつて日を拒む

海へ出て五月の川の塩辛き

墨の香や探梅の日を心待ち

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

万緑の中の危ない橋わたる

唾へられいまはの空を行く毛虫

水の香のプール帰りの五六人

追ふ馬は何処へゆきしすいつちよん

白も黄も春を知らざる秋の蝶

王道を歩むが如く鹿の角

~~花溜ちて風をきき  
ひらひらと~~

~~み門の空をせやさるん  
さくらんぼ~~





2020・5・11 【角川俳句賞2020 全399句】 選24句

浅春の日だまりにある水たまり

耕して土の断面ばかりなり

天井に届く悲しみ涅槃絵図

消印に消されし切手雁帰る

ビル裏に配管の巢や燕来る

川沿ひの二階の窓に子猫鳴く

花満ちて風なき空にひらひらと

波音の夜空に消ゆる松の芯

初夏やチクツとしますよと注射

海へ出て五月の川の塩辛き

名門の血を絶やさずにさくらんぼ

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

万緑の中の危ない橋わたる

唾へられいまはの空を行く毛虫

水の香のプール帰りの五六人

追ふ馬は何処へゆきしすいつちよん

白も黄も春を知らざる秋の蝶

王道を歩むが如く鹿の角

満月やダム湖の中の取水口

夕クシーの出払つてゐる昼の虫

干柿は軒に熟柿は枝にかな

荒海の向ふは佐渡よ日短

湖は氷湖となつて日を拒む

墨の香や探梅の日を心待ち

破製して因能流ゆる  
好かな

因能の流ゆる  
好かな

手くまると  
コト因能の  
好かな

飛行場周辺の空  
刈つてをよ

飛行場の  
外に揺れあふる内へ  
入れぬ

秋風の店く  
うさぎ

2020・5・12 【角川俳句賞2020 全400句】 選24句

浅春の日だまりにある水たまり 王道を歩むが如く鹿の角

耕して土の断面ばかりなり タクシーの出払つてゐる昼の虫

天井に届く悲しみ涅槃絵図 干柿は軒に熟柿は枝にかな

消印に消されし切手雁帰る 満月やダム湖の中の取水口

ビル裏に配管の巢や燕来る 荒海の向ふは佐渡よ日短

川沿ひの二階の窓に子猫鳴く 湖は氷湖となつて日を拒む

花満ちて風なき空にひらひらと 墨の香や探梅の日を心待ち

波音の夜空に消ゆる松の芯

海へ出て五月の川の塩辛き

名門の血を絶やさずにさくらんぼ

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

万緑の中の危ない橋わたる

啜へられいまはの空を行く毛虫

水の香のプール帰りの五六人

初秋の注射チクツとしますよと

白も黄も春を知らざる秋の蝶

追ふ馬は何処へゆきしすいつちよん

夜行バスのせり鳴く  
瓦の虫へ5.14

2020・5・14 【角川俳句賞2020 全413句】 選25句

浅春の日だまりにある水たまり

追ふ馬は何処へ行きしすいっちよん

耕して土の断面ばかりなり

王道を歩むが如く鹿の角

天井に届く悲しみ涅槃絵図

タクシーの出払つてゐる昼の虫

消印に消されし切手雁帰る

干柿は軒に熟柿は枝にかな

ビル裏に配管の巢や燕来る

満月やダム湖の中の取水口

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー

荒海の向ふは佐渡よ日短

破裂して風船消ゆる桜かな

湖は氷湖となつて日を拒む

波音の夜空に消ゆる松の芯

墨の香や探梅の日を心待ち

海へ出て五月の川の塩辛き

純白

名門の血を絶やさずにさくらんぼ

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

万緑の中の危ない橋わたる

啞へられいまはの空を行く毛虫

水の香のプール帰りの五六人

飛行場周辺の草刈つてをる

初秋の注射チクツとしますよと

白も黄も春を知らざる秋の蝶



2020・5・15 【角川俳句賞2020 全418句】 選26句

17行3段組12ポ 2020年5月15日 15:30 へ1 桐9

浅春の日だまりにある水たまり 王道を歩むが如く鹿の角  
耕して土の断面ばかりなり タクシーの出払つてゐる昼の虫  
天井に届く悲しみ涅槃絵図 干柿は軒に熟柿は枝にかな  
消印に消されし切手雁帰る 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
ビル裏に配管の巢や燕来る 満月やダム湖の中の取水口  
川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー 荒海の向ふは佐渡よ日短  
破裂して風船消ゆる桜かな 湖は氷湖となつて日を拒む  
波音の夜空に消ゆる松の芯 墨の香や探梅の日を心待ち  
海へ出て五月の川の塩辛き 春を待つ注射チクツとしますよと  
さくらんぼ美しき血を絶やさずに  
余生なほばたばた扇ぐ団扇かな  
万緑の中の危ない橋わたる  
啞へられいまはの空を行く毛虫  
水の香のプール帰りの五六人  
飛行場周辺の草刈つてをる  
白も黄も春を知らざる秋の蝶  
追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

2020・5・15 【角川俳句賞2020 全434句】 選28句

17行3段組12ポ 2020年5月15日 16:57 へ1 桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし 白も黄も春を知らざる秋の蝶

枯草の火力恐ろし畦を焼く 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

浅春の日だまりにある水たまり 王道を歩むが如く鹿の角

耕して土の断面ばかりなり タクシーの出払つてゐる昼の虫

天井に届く悲しみ涅槃絵図 干柿は軒に熟柿は枝にかな

消印に消されし切手雁帰る 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

ビル裏に配管の巢や燕来る 満月やダム湖の中の取水口

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー 荒海の向ふは佐渡よ日短

破裂して風船消ゆる桜かな 湖は氷湖となつて日を拒む

波音の夜空に消ゆる松の芯 墨の香や探梅の日を心待ち

海へ出て五月の川の塩辛き 春を待つ注射チクツとしますよと

さくらんぼ美しき血を絶やさずに

余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

万緑の中の危ない橋わたる

啜へられいまはの空を行く毛虫

水の香のプール帰りの五六人

飛行場周辺の草刈つてをる

土まの如く〜

土まの如く

2020・5・15 【角川俳句賞2020 全435句】 選29句

17行3段組12ポ 2020年5月15日 21:05 ↑桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし 余生なほばたばた扇ぐ団扇かな  
枯草の火力恐ろし畦を焼く 白も黄も春を知らざる秋の蝶  
浅春の日だまりにある水たまり 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん  
耕して土の断面ばかりなり 王道を歩むが如く鹿の角  
天井に届く悲しみ涅槃絵図 タクシーの出払つてゐる昼の虫  
消印に消されし切手雁帰る 干柿は軒に熟柿は枝にかな  
ビル裏に配管の巢や燕来る 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー 満月やダム湖の中の取水口  
破裂して風船消ゆる桜かな 荒海の向ふは佐渡よ日短  
波音の夜空に消ゆる松の芯 湖は氷湖となつて日を拒む  
海へ出て五月の川の塩辛き 墨の香や探梅の日を心待ち  
さくらんぼ美しき血を絶やさず 春を待つ注射チクツとしますよと  
万緑の中の危ない橋わたる  
土囊の如く金魚掬ひの子ら蹲踞む  
水の香のプール帰りの五六人  
飛行場周辺の草刈つてをる  
啞へられいまはの空を行く毛虫





2020・5・16 【角川俳句賞2020 全447句】 選36句

17行3段組12ポ 2020年5月16日 15:53 ↑1 ↓桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし 唾へられいまはの空を行く毛虫

湖は氷湖となつて日を拒む

枯草の火力恐ろし畦を焼く 水の香のプール帰りの五六人

墨の香や探梅の日を心待ち

浅春の日だまりにある水たまり 飛行場周辺の草刈つてをる

耕して土の断面ばかりなり マンションの又も建ちたる西日かな

春の服レインコートに透きとほる ポンと抜くかプシュと開けるか生ビールなり

天井に届く悲しみ涅槃絵図 余生なほばたばた扇ぐ団扇かな

春の風邪チクツとしますよと言はれ 白も黄も春を知らざる秋の蝶

消印に消されし切手雁帰る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

ビル裏に配管の巢や燕来る 王道を歩むが如く鹿の角

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー タクシーの出払つてゐる昼の虫

破裂して風船消ゆる桜かな 故郷が野分に揺れてゐるテレビ

波音は波の残骸松の芯 干柿は軒に熟柿は枝にかな

海へ出て五月の川の塩辛き 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 満月やダム湖の中の取水口

万緑の中の危ない橋わたる 時雨るるや金平糖の角の数

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 荒海の向ふは佐渡よ日短

蟬の穴しづか蟻の穴にぎやか 煮凝の白身魚の平べつた





2020・5・17 【角川俳句賞2020 全470句】 選36句

17行3段組12ポ 2020年5月17日 09:36 へ1 桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし 唾へられいまはの空を行く毛虫

湖は氷湖となつて日を拒む

枯草の火力恐ろし畦を焼く 水の香のプール帰りの五六人

墨の香や探梅の日を心待ち

浅春の日だまりにある水たまり 飛行場周辺の草刈つてをる

耕して土の断面ばかりなり マンションの又も建ちたる西日かな

春の服レインコートに透きとほる ポンと抜くビール家ではプシュと開け

天井に届く悲しみ涅槃絵図 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

春の風邪チクツとしますよと言はれ 白も黄も春を知らざる秋の蝶

消印に消されし切手雁帰る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

ビル裏に配管の巢や燕来る 王道を歩むが如く鹿の角

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー タクシーの出払つてゐる昼の虫

破裂して風船消ゆる桜かな 故郷の現在を見る野分野分の豆は野分かな

波音は波の残骸松の芯 干柿は軒に熟柿は枝に垂れ干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

海へ出て五月の川の塩辛き 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

さくららんぼ美しき血を絶やさずに 満月やダム湖の中の取水口

万緑の中の危ない橋わたる 時雨るるや金平糖の角かじる

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 荒海の向ふは佐渡よ日短

~~蝉の穴しづか蟻の穴にぎやか~~ 煮凝の白身魚の平べつた

息を止めておれぬ  
干柿 映を丸くしたる

茶の間に  
故郷の野分の様を

茶の間に



2020・5・18 【角川俳句賞2020 全480句】 選35句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし 飛行場周辺の草刈つてをる 墨の香や探梅の日を心待ち

枯草の火力恐ろし畦を焼く マンションの又も建ちたる西日かな

浅春の日だまりにある水たまり シヤワー浴ぶ四方の壁も流しやる

耕して土の断面ばかりなり ポンと抜くビール家ではプシュと開け

春の服レインコートに透きとほる 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

天井に届く悲しみ涅槃絵図 白も黄も春を知らざる秋の蝶

春の風邪チクツとしますよと言はれ 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

消印に消されし切手雁帰る 王道を歩むが如く鹿の角

ビル裏に配管の巢や燕来る タクシーの出払つてゐる昼の虫

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー 故郷の野分の様を茶の間にて

破裂して風船消ゆる桜かな 干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

波音は波の残骸松の芯 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

海へ出て五月の川の塩辛き 満月やダム湖の中の取水口

さくららば美しき血を絶やさずに 時雨るるや金平糖の角かじる

万緑の中の危ない橋わたる 荒海の向ふは佐渡よ日短

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 煮凝の白身魚の平べつた

啜へられいまはの空を行く毛虫 湖は氷湖となつて日を拒む

2020・5・19 【角川俳句賞2020 全487句】 選36句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな

枯草の火力恐ろし畦を焼く シヤワー浴ぶ四方の壁も流しやる

浅春の日だまりにある水たまり 皿の上に豆腐を置けば冷奴

耕して土の断面ばかりなり ポンと抜くビール家ではプシュと開け

天井に届く悲しみ涅槃絵図 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

春の風邪チクツとしますよと言はれ 白も黄も春を知らざる秋の蝶

消印に消されし切手雁帰る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

ビル裏に配管の巢や燕来る 王道を歩むが如く鹿の角

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー タクシーの出払つてゐる昼の虫

破裂して風船消ゆる桜かな 故郷の野分の様も映り映りをる

波音は波の残骸松の芯 干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

海へ出て五月の川の塩辛き 切り出して柱のごとし新豆腐

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

万緑の中の危ない橋わたる 満月やダム湖の中の取水口

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 時雨るるや金平糖の角かじる

啜へられいまはの空を行く毛虫 荒海の向ふは佐渡よ日短

飛行場周辺の草刈つてをる 煮凝の白身魚の平べつた

湖は氷湖となつて日を拒む  
墨の香や探梅の日を心待ち

17行3段組12ポ 2020年5月19日 15:57 ↑桐9

~~子の髪の手の白みと流ひつる  
白みと流ひつる~~

~~123 白みと流ひつる~~



2020・5・20 【角川俳句賞2020 全492句】 選36句

17行3段組12ポ 2020年5月20日 09:10 ↑ ↓ 桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな  
枯草の火力恐ろし畦を焼く 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

湖は氷湖となつて日を拒む  
墨の香や探梅の日を心待ち

浅春の日だまりにある水たまり ポンと抜くビール家ではプシュと開け

耕して土の断面ばかりなり 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

天井に届く悲しみ涅槃絵図 白も黄も春水春を知らざる秋の蝶

春の風邪チクツとしますよと言はれ 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

消印に消されし切手雁帰る 王道を歩むが如く鹿の角

ビル裏に配管の巢や燕来る タクシーの出払つてゐる昼の虫

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー 故郷の野分の様も少し映る

破裂して風船消ゆる桜かな 干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

波音は波の残骸松の芯 切り出して柱のごとし新豆腐

海へ出て五月の川の塩辛き 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 満月やダム湖の中の取水口

万緑の中の危ない橋わたる 時雨るるや金平糖の角かじる

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 荒海の向ふは佐渡よ日短

啜へられいまはの空を行く毛虫 煮凝の白身魚の平べつた

飛行場周辺の草刈つてをる 1 2 3 ダンス教室初稽古

2020・5・20 【角川俳句賞2020 全495句】 選38句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな

枯草の火力恐ろし畦を焼く 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

浅春の日だまりにある水たまり ポンと抜くビール家ではプシュと開け

耕して土の断面ばかりなり 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

天井に届く悲しみ涅槃絵図 流木に水着を干してキャンプの夜

春の風邪チクツとしますよと言はれ 白も黄も春を知らざる秋の蝶

消印に消されし切手雁帰る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

ビル裏に配管の巢や燕来る 王道を歩むが如く鹿の角

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー タクシーの出払つてゐる昼の虫

破裂して風船消ゆる桜かな 故郷の野分の様も少し映る

波音は波の残骸松の芯 干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

海へ出て五月の川の塩辛き 切り出して柱のごとし新豆腐

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

万緑の中の危ない橋わたる 満月やダム湖の中の取水口

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 時雨るるや金平糖の角かじる

啜へられいまはの空を行く毛虫 荒海の向ふは佐渡よ日短

飛行場周辺の草刈つてをる 1 2 3 ダンス教室初稽古

湖は氷湖となつて日を拒む  
魚屋の雪ふるころの品揃へ  
煮凝の白身魚の平べつた  
墨の香や探梅の日を心待ち



2020・5・22 【角川俳句賞2020 全516句】 選47句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし  
枯草の火力恐ろし畦を焼く

飛行場周辺の草刈つてをる  
マンションの又も建ちたる西日かな

時雨るるや金平糖の角かじる  
荒海の向ふは佐渡よ日短

浅春の日だまりにある水たまり

子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

去年今年物音もなき真の闇

耕して土の断面ばかりなり

ポンと抜くビール家ではプシユと開け

123 ダンス教室初稽古

天井に届く悲しみ涅槃絵図

余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

湖は氷湖となつて日を拒む

春の風邪チクツとしますよと言はれ

流木に水着を干してキャンプの夜

焼芋の甘さ鯛焼の甘さかな

消印に消されし切手雁帰る

しげしげと闇を眺むる花火の間

ざくざくと家族のための根深汁

ビル裏に配管の巢や燕来る

白も黄も春を知らざる秋の蝶

魚屋の雪ふるころの品揃へ

川沿ひに子猫の見ゆるバルコニー

追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

煮凝の白身魚の平べつた

破裂して風船消ゆる桜かな

王道を歩むが如く鹿の角

墨の香や探梅の日を心待ち

波音は波の残骸松の芯

タクシーの出払つてゐる昼の虫

立冬や割れぬコップで漱ぐ

海へ出て五月の川の塩辛き

故郷の野分の様も少し映る

ラグビーやボールも汗に塗れたる

さくらんぼ美しき血を絶やさずに

干柿は軒に熟柿は枝に垂れ

春を待つ四角の箱や猫を入れ

万緑の中の危ない橋わたる

切り出して柱のごとし新豆腐

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む

踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

啞へられいまはの空を行く毛虫

満月やダム湖の中の取水口

身を以て蠅に穢れし蠅叩

日向ぼこ心はここにあらねども



2020・5・22 【角川俳句賞2020 全520句】 選47句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし  
 枯草の火力恐ろし畦を焼く  
 浅春の日だまりにある水たまり  
 耕して土の断面ばかりなり  
 天井に届く悲しみ涅槃絵図  
 春の風邪チクツとしますよと言はれ  
 消印に消されし切手雁帰る  
 ビル裏に配管の巢や燕来る  
 川沿ひに子猫の出づるバルコニー  
 破裂して風船消ゆる桜かな  
 波音は波の残骸松の芯  
 海へ出て五月の川の塩辛き  
 さくらんぼ美しき血を絶やさずに  
 万緑の中の危ない橋わたる  
 土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む  
 啜へられいまはの空を行く毛虫  
 身を以て蠅に穢れし蠅叩

飛行場周辺の草刈つてをる  
 マンションの又も建ちたる西日かな  
 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり  
 ポンと抜くビール家ではプシユと開け  
 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる  
 流木に水着を干してキャンプの夜  
 しげしげと闇を眺むる花火の間  
 白も黄も春を知らざる秋の蝶  
 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん  
 王道を歩むが如く鹿の角  
 タクシーの出払つてゐる昼の虫  
 故郷の野分の様も少し映る  
 干柿は軒に熟柿は枝にかな  
 切り出して柱のごとし新豆腐  
 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
 満月やダム湖の中の取水口  
 立冬や割れぬコップで漱ぐ

17行3段組12ポ 2020年5月22日 16:24 桐9  
 時雨るるや金平糖の角欠けて  
 日向ぼこ心はここにあらねども  
 焼芋の甘さ鯛焼の甘さかな  
 ざくざくと家族のために葱刻む  
 煮凝の白身魚の平べつた  
 荒海の向ふは佐渡よ日短  
 去年今年物音もなき真の闇  
 1 2 3 ダンス教室初稽古  
 ラグビーやボールも汗に塗れたる  
 湖は氷湖となつて日を拒む  
 魚屋の雪ふるころの品揃へ  
 墨の香や探梅の日を心待ち  
 春を待つ四角の箱や猫を入れ

残れた心し

春を待つ四角の箱や猫を入れ  
 春を待つ  
 箱や猫を入れ

切子井直し



2020・5・23 【角川俳句賞2020 全553句】 選45句

17行3段組12ポ 2020年5月23日 17:48 ↑1 ↓桐9

明暗の春や根を張り芽を伸ばし  
枯草の火力恐ろし畦を焼く  
浅春の日だまりにある水たまり  
耕して土の断面ばかりなり  
天井に届く悲しみ涅槃絵図  
春の風邪チクツとしますよと言はれ  
消印に消されし切手雁帰る  
ビル裏に配管の巢や燕来る  
川沿ひに子猫の出づるバルコニー  
破裂して風船消ゆる桜かな  
波音は波の残骸松の芯  
海へ出て五月の川の塩辛き  
さくらんぼ美しき血を絶やさずに  
万緑の中の危ない橋わたる  
土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む  
啜へられいまはの空を行く毛虫  
自らも穢れて哀し蠅叩

飛行場周辺の草刈つてをる  
マンションの又も建ちたる西日かな  
余生なほばたばた扇ぐ団扇なり  
ポンと抜くビール家ではプシユと開け  
子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる  
流木に水着を干してキャンプの夜  
明るさの明日を信じて火取虫  
白も黄も春を知らざる秋の蝶  
追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん  
王道を歩むが如く鹿の角  
タクシーの出払つてゐる昼の虫  
故郷の野分の様も少し映る  
干柿は軒に熟柿は枝にかな  
切り出して柱のごとし新豆腐  
踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
満月やダム湖の中の取水口  
立冬や割れぬコップで漱ぐ

時雨るるや金平糖の角欠けて

ざくざくと家族のための葱刻む

煮凝の白身魚の平べつた

荒海の向ふは佐渡よ日短

煤逃のロマンスカーは鮭の色

幼子の大きなあくび初日の出

ラグビーのボールも汗に塗れたる

湖は氷湖となつて日を拒む

魚屋の雪ふるころの品揃へ

墨の香や探梅の日を心待ち

春を待つ小さな箱に猫ねむる

正月の物の欠けも

初芽のなつかしき場所を人

カルタぬる水はゆきか

母のあてき手

手が取る

一行は...

梅雨2-3

7月23日

初日32

一行は...



2020・5・24 【角川俳句賞2020 全597句】 選56句

明暗の春や根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな

枯草の火力恐ろし畦を焼く 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

浅春の日だまりにある水たまり ポンと抜くビール家ではプッシュと開け

耕して土の断面ばかりなり 子の髪髪の匂ひ確かめ洗ひやる

天井に届く悲しみ涅槃絵図 流木に水着を干してキャンプの夜

春の風邪チクツとしますよと言はれ 明るさの明日を信じて火取虫

消印に消されし切手雁帰る 白も黄も春を知らざる秋の蝶

ビル裏に配管の巣や燕来る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

川沿ひに子猫の出づるバルコニー 王道を歩むが如く鹿の角

破裂して風船消ゆる桜かな タクシーの出払つてゐる昼の虫

波音は波の残骸松の芯 故郷の野分の様も少し映る

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 干柿は軒に熟柿は枝にかな

万緑の中の危ない橋わたる 切り出して柱のごとし新豆腐

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

唾へられいまはの空を行く毛虫 満月やダム湖の中の取水口

自らも穢れて哀し蠅叩 立冬や割れぬコップで漱ぐ

飛行場周辺の草刈つてをる 時雨るるや金平糖の角欠けて

ざくざくと家族のための葱刻む

煮凝の白身魚の平べつた

荒海の向ふは佐渡よ日短

煤迷のロマンスカーは鮭の色

幼子の大きなあくび初日の出

湖は氷湖氷湖となつて日を拒む

魚屋の雪ふるころの品揃へ

墨の香や探梅の日を心待ち

春を待つ小さな箱に猫ねむる

いだかれてラグビーボール汗みどろ

海へ出て五月の川の塩辛き

トンネルの入口に舞ふ春の雪

悲しさや風邪の母から引き離され

小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯

何食つて声の大きな寒鴉

水仙を取り囲みたる書齋の書

雪折の現場近くを通りけり



大年の

2020・5・24 【角川俳句賞2020 全597句】

選56句

年歩むその足音を聞かんとすcf活に入ろま

御降の後の日和の定まりぬ

歌留多取る水仕で冷えし手が強し

双六の勝ち負けにみな笑ふかな存り

初夢の懐しき場所そして人

めとれまの A 雪花を

日幸の四季折々

絵双六

2020・5・25 【角川俳句賞2020 全602句】 選50句

17行3段組12ポ 2020年5月25日 09:42 へ1 桐9

トンネルの入口に舞ふ春の雪 飛行場周辺の草刈つてをる

小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯

明暗の春や根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな

煮凝の白身魚の平べつた

枯草の火力恐ろし畦を焼く 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

荒海の向ふは佐渡よ日短

浅春の日だまりにある水たまり 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

煤逃のロマンスカーは鮭の色

耕して土の断面ばかりなり 流木に水着を干してキャンプの夜

行く年のその足音を聞かんとす

天井に届く悲しみ涅槃絵図 明るさの明日を信じて火取虫

幼子の大きなあくび初日の出

春の風邪チクツとしますよと言はれ 白も黄も春を知らざる秋の蝶

御降の後の日和の定まりぬ

消印に消されし切手雁帰る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

めでたさの月雪花の絵双六

ビル裏に配管の巢や燕来る 王道を歩むが如く鹿の角

いだからてラグビーボール汗みどろ

破裂して風船消ゆる桜かな タクシーの出払つてゐる昼の虫

何食つて声の大きな寒鴉

波音は波の残骸松の芯 故郷の野分の様も少し映る

湖は氷湖となつて日を拒む

海へ出て五月の川の塩辛き 干柿は軒に熟柿は枝にかな

魚屋の雪ふるころの品揃へ

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 切り出して柱のごとし新豆腐

雪折の現場近くを通りけり

万緑の中の危ない橋わたる 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

水仙を取り囲みたる書齋の書

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 満月やダム湖の中の取水口

墨の香や探梅の日を心待ち

啜へられいまはの空を行く毛虫 立冬や割れぬコップで漱ぐ

春を待つ小さな箱に猫ねむる

自らも穢れて哀し蠅叩 ざくざくと家族のための葱刻む

春待つと猫のわがや

春待つと猫のわがや



2020・5・25 【角川俳句賞2020 全616句】 選48句

17行3段組12ポ 2020年5月25日 18:45 へ1 桐9

トンネルの入口に舞ふ春の雪  
 明暗の春や根を張り芽を伸ばし  
 枯草の火力<sup>よ</sup>恐ろし畦を焼く  
 浅春の日だまりにある水たまり  
 耕して土の断面ばかりなり  
 天井に届く悲しみ涅槃絵図  
 春の風邪チクツとしますよと言はれ  
 消印に消されし切手雁帰る  
 ビル裏に配管の巢や燕来る  
 破裂して風船消ゆる桜かな  
 波音は波の残骸松の芯  
 海へ出て五月の川の塩辛き  
 さくらんぼ美しき血を絶やさずに  
 万緑の中の危ない橋わたる  
 土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む  
 啜へられいまはの空<sup>を</sup>行く毛虫  
 自らも穢れて哀し蠅叩

飛行場周辺の草刈つてをる  
 マンションの又も建ちたる西日かな  
 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり  
 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる  
 流木に水着を干してキャンプの夜  
 明るさの明日を信じて火取虫  
 白も黄も春を知らざる秋の蝶  
 追ふ馬は何処へ行きしすいっちゃん  
 王道を歩むが如く鹿の角  
 タクシーの出払つてゐる昼の虫  
 故郷の野分の様も少し映る  
 干柿は軒に熟柿は枝にかな  
 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
 満月やダム湖の中の取水口  
 落としても割れぬコップや今朝の冬  
 ざくざくと家族のための葱刻む  
 小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯

煮凝の白身魚の平べつた  
 荒海の向ふは佐渡よ日短  
 煤迷のロマンスカーは鮭の色  
 幼子の大きなあくび初日の出  
 御降の後の日和の定まりぬ  
 双六に負けたることの目出度さよ  
 いだかれてラグビーボール汗みどろ  
 何食つて声の大きな寒鴉  
 湖は氷湖となつて日を拒む  
 魚屋の雪ふるころの品揃へ  
 雪折の現場近くを通りけり  
 水仙を取り囲みたる書斎の書  
 墨の香や探梅の日を心待ち  
 春待つや猫より小さき箱に猫

そし今の<sup>たたり</sup>記<sup>か</sup>つてい

おな<sup>て</sup>を<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
ボリ<sup>ー</sup>正<sup>一</sup>

スイコウの<sup>手</sup>ひたえ  
 スイコウ<sup>故</sup>・<sup>ほ</sup>句<sup>故</sup>  
 煮凝の<sup>白</sup>身<sup>魚</sup>の<sup>平</sup>べつた  
 荒海の<sup>向</sup>ふは<sup>佐</sup>渡<sup>よ</sup>日<sup>短</sup>  
 煤迷の<sup>ロ</sup>マ<sup>ン</sup>ス<sup>カ</sup>ーは<sup>鮭</sup>の<sup>色</sup>  
 幼子の<sup>大</sup>きな<sup>あ</sup>く<sup>び</sup>初<sup>日</sup>の<sup>出</sup>  
 御降の<sup>後</sup>の<sup>日</sup>和<sup>の</sup>定<sup>ま</sup>り<sup>ぬ</sup>  
 双六に<sup>負</sup>けた<sup>こ</sup>の<sup>目</sup>出<sup>度</sup>さ<sup>よ</sup>  
 いだかれて<sup>ラ</sup>グ<sup>ビ</sup>ー<sup>ボ</sup>ール<sup>汗</sup>み<sup>ど</sup>ろ  
 何食つて<sup>声</sup>の<sup>大</sup>きな<sup>寒</sup>鴉  
 湖は<sup>氷</sup>湖<sup>と</sup>な<sup>つ</sup>て<sup>日</sup>を<sup>拒</sup>む  
 魚屋の<sup>雪</sup>ふる<sup>こ</sup>ろ<sup>の</sup>品<sup>揃</sup>へ  
 雪折の<sup>現</sup>場<sup>近</sup>く<sup>を</sup>通<sup>り</sup>け<sup>り</sup>  
 水仙を<sup>取</sup>り<sup>囲</sup>み<sup>た</sup>る<sup>書</sup>斎<sup>の</sup>書  
 墨の<sup>香</sup>や<sup>探</sup>梅<sup>の</sup>日<sup>を</sup>心<sup>待</sup>ち  
 春待つ<sup>や</sup>猫<sup>よ</sup>り<sup>小</sup>さ<sup>き</sup>箱<sup>に</sup>猫

おな<sup>て</sup>を<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
ボリ<sup>ー</sup>正<sup>一</sup>  
 煮凝の<sup>白</sup>身<sup>魚</sup>の<sup>平</sup>べつた  
 荒海の<sup>向</sup>ふは<sup>佐</sup>渡<sup>よ</sup>日<sup>短</sup>  
 煤迷の<sup>ロ</sup>マ<sup>ン</sup>ス<sup>カ</sup>ーは<sup>鮭</sup>の<sup>色</sup>  
 幼子の<sup>大</sup>きな<sup>あ</sup>く<sup>び</sup>初<sup>日</sup>の<sup>出</sup>  
 御降の<sup>後</sup>の<sup>日</sup>和<sup>の</sup>定<sup>ま</sup>り<sup>ぬ</sup>  
 双六に<sup>負</sup>けた<sup>こ</sup>の<sup>目</sup>出<sup>度</sup>さ<sup>よ</sup>  
 いだかれて<sup>ラ</sup>グ<sup>ビ</sup>ー<sup>ボ</sup>ール<sup>汗</sup>み<sup>ど</sup>ろ  
 何食つて<sup>声</sup>の<sup>大</sup>きな<sup>寒</sup>鴉  
 湖は<sup>氷</sup>湖<sup>と</sup>な<sup>つ</sup>て<sup>日</sup>を<sup>拒</sup>む  
 魚屋の<sup>雪</sup>ふる<sup>こ</sup>ろ<sup>の</sup>品<sup>揃</sup>へ  
 雪折の<sup>現</sup>場<sup>近</sup>く<sup>を</sup>通<sup>り</sup>け<sup>り</sup>  
 水仙を<sup>取</sup>り<sup>囲</sup>み<sup>た</sup>る<sup>書</sup>斎<sup>の</sup>書  
 墨の<sup>香</sup>や<sup>探</sup>梅<sup>の</sup>日<sup>を</sup>心<sup>待</sup>ち  
 春待つ<sup>や</sup>猫<sup>よ</sup>り<sup>小</sup>さ<sup>き</sup>箱<sup>に</sup>猫

煮凝の<sup>白</sup>身<sup>魚</sup>の<sup>平</sup>べつた  
 荒海の<sup>向</sup>ふは<sup>佐</sup>渡<sup>よ</sup>日<sup>短</sup>  
 煤迷の<sup>ロ</sup>マ<sup>ン</sup>ス<sup>カ</sup>ーは<sup>鮭</sup>の<sup>色</sup>  
 幼子の<sup>大</sup>きな<sup>あ</sup>く<sup>び</sup>初<sup>日</sup>の<sup>出</sup>  
 御降の<sup>後</sup>の<sup>日</sup>和<sup>の</sup>定<sup>ま</sup>り<sup>ぬ</sup>  
 双六に<sup>負</sup>けた<sup>こ</sup>の<sup>目</sup>出<sup>度</sup>さ<sup>よ</sup>  
 いだかれて<sup>ラ</sup>グ<sup>ビ</sup>ー<sup>ボ</sup>ール<sup>汗</sup>み<sup>ど</sup>ろ  
 何食つて<sup>声</sup>の<sup>大</sup>きな<sup>寒</sup>鴉  
 湖は<sup>氷</sup>湖<sup>と</sup>な<sup>つ</sup>て<sup>日</sup>を<sup>拒</sup>む  
 魚屋の<sup>雪</sup>ふる<sup>こ</sup>ろ<sup>の</sup>品<sup>揃</sup>へ  
 雪折の<sup>現</sup>場<sup>近</sup>く<sup>を</sup>通<sup>り</sup>け<sup>り</sup>  
 水仙を<sup>取</sup>り<sup>囲</sup>み<sup>た</sup>る<sup>書</sup>斎<sup>の</sup>書  
 墨の<sup>香</sup>や<sup>探</sup>梅<sup>の</sup>日<sup>を</sup>心<sup>待</sup>ち  
 春待つ<sup>や</sup>猫<sup>よ</sup>り<sup>小</sup>さ<sup>き</sup>箱<sup>に</sup>猫



2020・5・26 【角川俳句賞2020 全654句】 選51句

17行3段組12ポ 2020年5月26日 13:15 へ1 桐9

トンネルの入口に舞ふ春の雪 飛行場周辺の草刈つてをる

落としても割れぬコップを今朝の冬

明暗の春よ根を張り芽を伸ばし マンションの又も建ちたる西日かな

ざくざくと葱を刻んで子沢山

枯草の火力恐ろし畦を焼く 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯

浅春の日だまりにある水たまり 皿の上に豆腐を置けば冷奴

煮凝の白身魚の平べつた

耕して土の断面ばかりなり 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

荒海の向ふは佐渡よ日短

天井に届く悲しみ涅槃絵図 流木に水着を干してキャンプの夜

煤逃のロマンスカーは鮭の色

春の風邪チクツとしますよと言はれ 明るさの明日を信じて火取虫

幼子の大きなあくび初日の出

消印に消されし切手雁帰る 白も黄も春を知らざる秋の蝶

御降の後の日和の定まりぬ

ビル裏に配管の巢や燕来る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

空を行く櫓より大きき宝船

破裂して風船消ゆる桜かな 王道を歩むが如く鹿の角

負けてやる筈の双六勝ちさうな

波音は波の残骸松の芯 タクシーの出払つてゐる昼の虫

何食つて大きな声の寒鴉

海へ出て五月の川の塩辛き 故郷の野分の様も少し映る

湖は氷湖となつて日を拒む

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 干柿は軒に熟柿は枝にかな

魚屋の雪ふるころの品揃へ

万緑の中の危ない橋わたる 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

雪折の現場近くを通りけり

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 親子井親子で食べる秋の暮

水仙を取り囲みたる書齋の書

啜へられいまはの空を行く毛虫 満月やダム湖の中の取水口

墨の香や探梅の日を心待ち

自らも穢れて哀し蠅叩 秋深しへうたんいよよへうたんに

春待つや猫より小さき箱に猫



未完  
未完  
未完

2020.5.26 【角川俳句賞2020 全660句】

選51句

17行3段組12ポ 2020年5月26日 17:07へ1桐9

辞書の項おほかた読まず天の川 唾へられいまはの空を行く毛虫

トンネルの入口に舞ふ春の雪 自らも穢れて哀し蠅叩

明暗の春よ根を張り芽を伸ばし 飛行場周辺の草刈つてをる

枯草の火力恐ろし畦を焼く マンションの又も建ちたる西日かな

浅春の日だまりにある水たまり 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

耕して土の断面ばかりなり 皿の上に豆腐を置けば冷奴

天井に届く悲しみ涅槃絵図 子の髪の毛ひ確かめ洗ひやる

春の風邪チクツとしますよと言はれ 流木に水着を干してキャンプの夜

消印に消されし切手雁帰る 白も黄も春を知らざる秋の蝶

ビル裏に配管の巣や燕来る 追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

破裂して風船消ゆる桜かな 王道を歩むが如く鹿の角

波音は波の残骸松の芯 タクシーの出払つてゐる昼の虫

海へ出て五月の川の塩辛き 故郷の野分の様も少し映る

さくらんぼ美しき血を絶やさずに 干柿は軒に熟柿は枝にかな

干傘の滴り光る蝸牛 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

万緑の中の危ない橋わたる 親子井親子で食べて秋の暮

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む 満月やダム湖の中の取水口

秋深しへうたんいよよへうたんに

落としても割れぬコップを今朝の冬

ざくざくと葱を刻んで子沢山

小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯

煮凝の白身魚の平べつた

荒海の向ふは佐渡よ日短

煤逃のロマンスカーは鮭の色

大いなる赤子のあくび初日の出

御降の後の日和の定まりぬ

負けてやる筈の双六勝ちさうな

何食つて大きな声の寒鴉

湖は氷湖となつて日を拒む

魚屋の雪ふるころの品揃へ

雪折の現場近くを通りけり

水仙を取り囲みたる書齋の書

墨の香や探梅の日を心待ち

春待つや猫より小さき箱に猫

私の夜の子んは 5.28

大へは 未完

しほく 未完

さみ







2020・5・28 【角川俳句賞2020 小さき箱全700句】

選51句

3段組12ポ 2020年5月28日 14:09 へ1 桐9

正正正正  
正正正正  
中ふと  
正正正正

止む方  
休む方  
25  
7  
同言19

2020年5月28日  
本選20

トイ  
同言  
同言

トンネルを抜けて明るし春の雪  
明暗の春よ根を張り芽を伸ばし  
枯草の火力恐ろし畦を焼く  
浅春の日だまりにある水たまり  
耕して土の断面ばかりなり  
天井に届く悲しみ涅槃絵図  
春の風邪チクツとしますよと言はれ  
消印に消されし切手雁帰る  
ビル裏に配管の巢や燕来る  
破裂して風船消ゆる桜かな  
波音は波の残骸松の芯  
海へ出て五月の川の塩辛き  
さくらんぼ美しき血を絶やさずに  
干傘のきらきら光る蝸牛  
万緑の中の危ない橋わたる  
土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む  
啜へられいまはの空を行く毛虫

自らも穢れて哀し蠅叩  
飛行場周辺の草刈つてをる  
マンションの又も建ちたる西日かな  
余生なほばたばた扇ぐ団扇なり  
皿に置く豆腐すなはち冷奴  
子の髪の毛の匂ひ確かめ洗ひやる  
流木に水着を干してキャンプの夜  
爆発の大爆発の揚花火  
白も黄も春を知らざる秋の蝶  
追ふ馬は何処へ行きしすいっちゃん  
王道を歩むが如く鹿の角  
タクシーの出払つてゐる昼の虫  
故郷の野分の様も少し映る  
干柿は軒に熟柿は枝にかな  
踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
親子井親子で食べて秋の暮  
秋風に吹かるるままに飛び去りぬ

満月やダム湖の中の取水口  
秋の夜に学ぶは楽しチョコレート  
落としても割れぬコップを今朝の冬  
ざくざくと葱を刻んで子沢山  
小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯  
煮凝の白身魚の平べつた  
荒海の向ふは佐渡よ日短  
煤逃のロマンスカーは鮭の色  
大いなる赤子のあくび初日の出  
御降の後の日和の定まりぬ  
負けてやる筈の双六勝ちさうな  
湖は氷湖となつて日を拒む  
魚屋の雪ふるころの品揃へ  
雪折の現場近くを通りけり  
水仙を取り囲みたる書斎の書  
墨の香や探梅の日を心待ち  
春待つや猫より小さき箱に猫



トンネルを抜けて明るし春の雪  
 明暗の春よ根を張り芽を伸ばし  
 枯草の火力恐ろし畦を焼く  
 浅春の日だまりにある水たまり  
 耕して土の断面ばかりなり  
 天井に届く悲しみ涅槃絵図  
 春の風邪チクツとしますよと言はれ  
 消印に消されし切手雁帰る  
 破裂して風船消ゆる桜かな  
 波音は波の残骸松の芯  
 海へ出て五月の川の塩辛き  
 さくらんぼ美しき血を絶やさず  
 干傘のきらきら光る蝸牛  
 万緑の中の危ない橋わたる  
 土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む  
 啜へられいまはの空を行く毛虫  
 自らも穢れて哀し蠅叩

飛行場周辺の草刈つてをる  
 マンションの又も建ちたる西日かな  
 余生なほばたばた扇ぐ団扇なり  
 皿に置く豆腐すなはち冷奴  
 子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる  
 流木に水着を干してキャンプの夜  
 爆発の大爆発の揚花火  
 白も黄も春を知らざる秋の蝶  
 追ふ馬は何処へ行きしすいっちゃん  
 王道を歩むが如く鹿の角  
 タクシーの出払つてゐる昼の虫  
 故郷の野分の様も少し映る  
 干柿は軒に熟柿は枝にかな  
 踏まれたる木の実の白き悲鳴なり  
 親子井親子で食べて秋の暮  
 秋風に乗って遠くへ飛び行けり  
 満月やダム湖の中の取水口

秋の夜に学ぶは楽しチヨコレート  
 落としても割れぬコップを今朝の冬  
 ざくざくと葱を刻んで子沢山  
 小魚が寄る鮫鱈の冷たき灯  
 煮凝の白身魚の平べつた  
 荒海の向ふは佐渡よ日短  
 煤逃のロマンスカーは鮭の色  
 大いなる赤子のあくび初日の出  
 御降の後の日和の定まりぬ  
 負けてやる筈の双六勝ちさうな  
 湖は氷湖となつて日を拒む  
 魚屋の雪ふるころの品揃へ  
 雪折の現場近くを通りけり  
 水仙を取り囲みたる書齋の書  
 墨の香や探梅の日を心待ち  
 春待つや猫より小さき箱に猫



2020・5・29 【角川俳句賞2020 小さき箱 全716句】

選50句

3段組12ポ 2020年5月29日 10:15 へ1 桐9

トンネルを抜けて明るし春の雪

飛行場周辺の草刈つてをる

満月やダム湖の中の取水口

明暗の春よ根を張り芽を伸ばし

マンションの又も建ちたる西日かな

落としても割れぬコップを今朝の冬

枯草の火力恐ろし畦を焼く

余生なほばたばた扇ぐ団扇なり

ざくざくと葱を刻んで子沢山

浅春の日だまりにある水たまり

皿に置く豆腐すなはち冷奴

煮凝の白身魚の平べつた

耕して土の断面ばかりなり

子の髪の匂ひ確かめ洗ひやる

荒海の向ふは佐渡よ日短

天井に届く悲しみ涅槃絵図

流木に水着を干してキャンプの夜

小魚を寄せ鮫鱈の冷たき灯

春の風邪チクツとしますよと言はれ

爆発の大爆発の揚花火

煤逃のロマンスカーは鮭の色

消印に消されし切手雁帰る

よく遊びよく学ぶべき秋のチョコ

大いなる赤子のあくび初日の出

破裂して風船消ゆる桜かな

秋風に乗つて遠くへ行く虫ぞ

御降の後の日和の定まりぬ

波音は波の残骸松の芯

白も黄も春を知らざる秋の蝶

負けてやる筈の双六勝ちさうな

海へ出て五月の川の塩辛き

追ふ馬は何処へ行きしすいつちよん

湖は氷湖となつて日を拒む

さくらんぼ美しき血を絶やさずに

王道を歩むが如く鹿の角

魚屋の雪ふるころの品揃へ

干傘は開き蝸牛は渦巻いて

タクシーの出払つてゐる昼の虫

雪折の現場近くを通りけり

万緑の中の危ない橋わたる

故郷の野分の様も少し映る

水仙を取り囲みたる書齋の書

土囊の如く金魚掬ひの子ら躊躇む

干柿は軒に熟柿は枝にかな

墨の香や探梅の日を心待ち

啜へられいまはの空を行く毛虫

踏まれたる木の実の白き悲鳴なり

春待つや猫より小さき箱に猫

自らも穢れて哀し蠅叩

親子井親子で食べて秋の暮